令和 6 年度 大学活性化経費 事業成果報告書

事業区分 (6) その他、大学の活性化に貢献する取り組み

申請組織 外国語学部

申請組織長 役職名 外国語学部長 氏名 藤岡阿由未

統括責任者 役職名 外国語学部教授 氏名 水島 和則

課題名 SUGIYAMA エアラインシンポジウム ―キャリアとしての航空業界を考える―

	役割	氏名	所属・役職名	役割分担
事業組織	統括責任	水島 和則	外国語学部教授	事業全般を担当
	事業協力者	小澤 英二	外国語学部教授	事業サポートを担当

1. 事業開始の背景・経緯や目的等 (200 字～300 字程度で記述)

今年度で 11 回目となった SUGIYAMA エアラインシンポジウムは、主に以下の目的で実施されてきた。

- 1 エアライン業界を進路の選択肢に入れている在学生在が業界や職種について、さらに在学中に準備すべき事柄について理解を深める。
- 2 エアライン業界で活躍する卒業生の勇姿を目の当たりにすることで、在学生在がモチベーションを高められるようにする。
- 3 卒業生と在在生との絆を築き、就職活動時に相談に乗ってもらうなど相互扶助体制を強化する。
- 4 エアライン業界に人材を輩出してきた大学の実績を大学内外に広く知らしめる広報の一環となる。

2. 事業方法 (特色・独創性) 等 (300 字程度で記述)

近年、航空大手各社が SNS による情報発信に力を入れており、YouTube 動画などに現役社員が登場して、主な業務内容や 1 日・1 か月の業務スケジュールを紹介していることも多い。

このシンポジウムではこうした動向をふまえて、人事担当者からの企業説明はもとより、こうした SNS 動画でもカバーできない、卒業生の生の声を聞けるメリットを前面に出している。具体的には、複数の航空会社に勤務してキャリアを重ねてきた方、コロナ禍を機に業界内での転職や職場異動を経験された方を登壇者に呼んでおり、キャリアという点から在在生の認識を深める内容としている。また、今回から登壇者の卒業生と在在生とが直接に交流する時間を設けた。3 名の卒業生それぞれを囲む質疑応答など話し合いのセッションを 20 分ずつ 3 回設定し、コミュニケーションのハードルを下げて交流を促進した。

3. 事業の成果 (600字～800字程度で記述)

今回は日系航空大手の A 社に勤務する客室乗務員、成田空港で地上オペレーションをおこなう B 社に勤務する地上職、アジア系航空会社を複数経験し、今は日系航空大手が近年に設立し、高い収益性で業界の注目を集めている C 社に勤務する客室乗務員の 3 人の卒業生が登壇した。登壇者のプレゼンは、業務に求められるスキル内容や、キャリアのステップを進めるうえで必要となる資格などについて具体的かつ詳細に説明するもので、非常に貴重な内容であった。また、登壇者はいずれもコロナ禍の困難をくぐり抜けた人たちであり、キャリア教育という観点からも学ぶところの多い内容であった。

出席者数は 20 名程度で「シンポジウム」と呼ぶには少なすぎたが、これから就職活動を開始しようとする 3 年生を中心に、非常に意識の高い少数精鋭の学生が集まった。また、事業責任者の所属する外国語学部・国際コミュニケーション学部にとどまらず複数の学部から学生が参加したばかりか、他大学から参加した学生もいた。出席者のアンケートでは、すべての回答者から「大変参考になった」「参考になった」という回答を得た。

登壇者の発表内容は、在学生の就職活動へのモチベーション向上やキャリア意識の醸成に繋がったと考えられる。さらに当日の司会進行は有志の学生が行うなど、学生がシンポジウム運営の一端を担うことにより 彼女らの社会人基礎力醸成にも寄与している。シンポジウムの第二部として卒業生と学生の交流があり、卒業生と在学生のつながりを強くするという目的も達成できた。

4. キーワード (本事業のキーワードを 1 つ以上 8 つ以内で記載)

① 航空業界研究	② 業務・資格の理解	③ キャリア意識の醸成	④ 卒業生と在学生の絆
⑤	⑥	⑦	⑧

5. 事業の達成状況及び今後の課題 (事業の達成状況を踏まえて、課題、反省点、及び今後の取組みを具体的に記載すること。)

卒業生のスケジュール調整が困難を極めるなか、今年度も A 社、B 社、C 社の 3 社より 3 名の卒業生に協力していただくことができた。とくに、C 社で客室乗務員を務める卒業生から、アジア系航空会社の勤務経験という貴重な話を聞いたことは大きな収穫であった。また、交流会の時間を設けたことにより、参加者の満足度も例年以上に高くなった。

参加者の少なさが課題となっており、他大学からの参加者があったことをふまえて、広報のあり方を工夫していきたい。また、他大学との共同開催を検討する、あいち航空ミュージアムのような別会場での違った形式で開催をめざすなど、新しいシンポジウムのかたちを模索していくことが今後の課題である。